

島根県立石見美術館

研究紀要

第10号

2016

石見仏像調査報告

.....

椋木 賢治

石見仏像調査報告

椋木賢治

平成二十七年（二〇一五）十月、島根県立石見美術館が開館十周年を迎えることを記念して企画展「祈りの仏像 石見の地より」が開催された。これに先立ち本展に向け、平成二十五年（二〇一三）石見全域を対象とする仏像調査を計画した。島根県西部にあたる石見地域（大田市、江津市、浜田市、益田市、邑智郡川本町、邑智郡美郷町、邑智郡邑南町、鹿足郡津和野町、鹿足郡吉賀町）に所在するおよそ六百件の寺院を対象にアンケート調査を実施し、古仏の有無と調査受人希望の有無を尋ねた。平成二十六年（二〇一四）春、一次調査（所在調査）として、調査の受入を希望した約五十件の寺院を対象に安置される仏像を実見した。同年秋、一次調査の結果を踏まえ、十一軀の仏像を対象に二次調査（詳細調査）を実施した。加えて展覧会に向けた補足調査として、石見に隣接する出雲市多伎町本願寺の仏像二軀についても調査の機会に恵まれた。本稿はこれらの調査によって得られた所見を報告するものである。

なお二次調査においては、多くの調査で河野克彦氏（島根県立美術館専門学芸員）、本願寺の調査で岡宏三氏（島根県立古代出雲歴史博物館専門学芸員）と福岡淳子氏（出雲市文化財課主任）の協力を賜った。また掲載した写真は杉本和樹氏（西大寺フォト）によるものである（赤外線写真を除く）。記して謝意を表したい。

1. 観音菩薩立像

圓福寺（大田市祖式町四五九）

概要

木造 素地 彫眼 一軀 像高四二・一cm

形状

数条の髪束を捻りながら螺髻を高く結う。毛髪は天冠台より上の地髪部は毛筋を表さず、その他は毛筋を荒く彫り、後頭部では一定のまとまりをもつ髪束が髪際で巻毛となる。鬢髪は強く波打ち先端を尖らせる。天冠台は連珠と無文帯からなるか（摩耗により不詳）。面貌は、額から鼻梁へと一面に連なり、彫りが深く面長で、目頭目尻の深い杏仁様に見開かれた眼形、肉厚な口唇を備え、口の両端から顎へと窪みをつけて頬の丸味を表している。白毫相、三道相を表す。左脇から背面にかけて胸腹間に肉皺が一条刻まれる。天衣は両肩を背面から覆い、体側に沿って腰まで垂れて以下欠失。両腰の残存部直上の腹部辺りでは僅かに彫り透かしている。条帛は左肩に襷掛けに廻し、前面左腹部と背面左肩下にそれぞれ両端を垂らす。下半身には裙と腰布を着け、上部を石帯で留める。裙の衣文は両膝下

に深く捻塑的な翻波をつくり、背面は左右から各二条、弧を描くように刻む。前面中央の打ち合わせは波状に折り返す。胸飾りは二条乃至三条の連珠を花形環で繋ぐが、摩耗と欠損により垂飾の詳細は不明。石帯は六条の連珠からなり、上下の縁から裾の折り返しが波状をなして覗く。石帯中央部に比較的大きな裝飾跡を残すが欠損により明らかでない。腰布の縁に房を垂らす。左脚に重心をかけ、右膝を軽く曲げて立つ。

法 量 (cm)

像 高 四二・一 (一尺三寸九分)

髮際高 三六・六 (一尺二寸一分)

頂上顎 一二・四 面 長 五・一

面 幅 三・三 耳 張 四・三

面 奥 五・六 胸 奥 六・八 (左)

腹 奥 六・六 肘 張 一四・一

裾 張 八・九

品質構造

針葉樹材(榧か)。一木造り。素地仕上げ。彫眼。

頭体幹部を榧と見られる針葉樹の一材から彫出し、内割りは施さない。後方やや左に木芯を外す。胸飾も同材から彫出する。両足底面に高2mm程度の加工痕が認められ、当初は台座蓮肉部までを一材で制作した可能性を示す。像底には正中に沿って前後二つの小孔を穿つ。天冠台、石帯を彫出する。両肩から先は、左肩に天衣の一部

をなす薄い別材を挟むほか、肩から肘まで各別材、肘から手首まで各別材、手首先各別材からなる。

表面は後補の砥粉下地が両腕に部分的に残る以外は素地を呈する。

伝 来

一、本像は圓福寺本尊として本堂須弥壇の厨子内に安置されている。秘仏。圓福寺は高野山真言宗に属し、山号は如意山。寺伝では祖式城主初代の菩提寺で祖式八幡宮の別当寺として建立されたものとされるが、二度の火災(正徳四年(一七一四)以前と、天保元年(一八三〇)とされる)により寺歴の詳細は不明。

二、圓福寺本堂に「奉再建如意山圓福寺本堂二字」(嘉永三年(一八五〇)三月)、「奉入仏聖觀自在薩埵安置」(文久三年(一八六三)三月二十四日)の棟札がある。

三、寺伝では觀音菩薩像とされるものの觀音の標識である化仏は認められない。

保存状態

胸飾の一部、左足先、左耳垂部、以上欠失。宝冠(銅製鍍金)、白毫(水晶製嵌入)、右耳垂部、両肩以下、右足先、両足柄、蓮莖、天衣の一部、以上後補。
光背、台座、以上後補。

備 考

一、請来壇像の影響下に制作された奈良時代(八世紀)の一木彫成

像に典型的な形状と様式を備える。高く結われた螺髻、波打つ鬘髪、異国風の面貌、共木から彫出された胸飾、裙の上部を留める石帯、腰布下部の房状飾り、膝下の翻波式衣文、背面の弧を描く衣文など、唐招提寺伝来の一群の木彫像、なかでも伝大自在菩薩像、伝獅子吼菩薩像に源流が求められる形状や表現が認められる。像の大きさはいわゆる一搦手半に表され、櫃と思しき用材とともに壇像を意識した造像と考えられる。台座蓮肉部を含んで頭体根幹部を一材から造立した可能性を示すことはさらにこの考えを後押しする。

二、本像が伝来する圓福寺については寺歴の詳細は不明。本像の由来を知る手がかりは少ないものの、制作が奈良時代に遡る木彫像は中国地方最古級であり、本像伝来の意義は大きいものといえる。石見地方では近年発見された安立寺・千手観音菩薩立像（大田市）が平安時代、十世紀頃の制作と考えられるほかは比較しうる作例に恵まれない。奈良時代の制作として明確に位置づけられる作例としては山陰地方全体でも他になく、観音寺・千手観音菩薩立像（鳥取県北栄町）が平安初期の作例とされつつ、奈良時代に遡る可能性を指摘されるに留まるところであるが、本像との比較において観音寺像の年代観にも検証が及ぼう。近年、近畿以外の地域でも木彫像の発見が奈良時代に遡る可能性が指摘されるなか、本像の発見が山陰地方における木彫像の系譜に新たな見解を加えることも期待したい。

三、実査 平成二十六年（二〇一四）十月八日

2. 阿弥陀如来坐像

龍蔵寺（大田市温泉津町井田イ二八の二）

概要

木造 彫眼 一軀 像高八六・八cm

形状

螺髻は粒状に表し、髮際四十四粒、地髪部六段、肉髻部十六段からなる。肉髻珠、白毫相、三道相を表す。耳垂部環状。鼻孔を浅く穿つ。衲衣は左肩を覆い、右肩に少し懸かり、両足半ばを覆う。先端は左肩に掛かって垂下する。衣文は浅く穏やかに均質な調子で刻む。右手を胸前に挙げ、左手を膝上に置き、それぞれ第一・二指を捻じ、右脚を外にして結果跏趺坐する。

法量 (cm)

像 高 八六・八（二尺八寸六分）

髮際高 七五・七（二尺五寸）

頂上顎	二八・二	面長	一五・六
面幅	一四・九	耳張	二一・七
面奥	一一・六	胸奥	二二・四（右）
腹奥	二五・八	肘張	四九・八
膝張	七〇・一	膝高	一三・四
膝奥	四二・一	裳先奥	四七・八

品質構造

針葉樹材（檜か）。寄木造り。彫眼。

頭体幹部は左右二材を寄せ、内割りを施し割首する。背面に背板状に左右二材を襟の線で体幹材と矧ぎ合わせ地付まで至る。左腕を含む体側部別材。右体側部別材。両脚部横一材。以上の材は各内割り。左手首先別材。右腕部は構造不明。裳先別材。頭体幹部と両脚部材との間に後補の襠材（厚一・四cm）を挟む。右腰に上下二材の三角材を矧ぐ。内割りに鑿跡を残し、鑿幅は最大二・一cm程度。根幹材は奥行一七・五cm、幅一三・五×一五・〇cm程度を計る。

伝来

- 一、本像は龍藏寺本堂脇壇に安置されている。龍藏寺は浄土真宗本願寺派に属し、山号は海東山。
- 二、龍藏寺に伝わる古文書（宝暦七年（一七五七））によれば本像は龍藏寺前身の真言宗時代の本尊とされ、宝暦七年当時は境内の小堂に安置されていたという。
- 三、『石見六郡社寺誌』によれば「もと真言宗の古刹であったが天正二十年六月、当地の地頭大島和泉守が阿弥陀如来の木像を寄進し、真宗に改宗することを命じた」とされる。

保存状態

像底蓋板後半を欠失。肉髻珠・白毫（各水晶製嵌入）、左右手首先、後襟の一部、右腰の一部、体幹部と膝前材との間の襠材、裳先、像底蓋板（布貼り漆塗り。板柄を付ける）、表面仕上げ（漆箔。頭

部と眼部は彩色仕上げ）、以上後補。

備考

- 一、近年の修理による表面仕上げによって本来の像容を正確に知ることは難しいが、平安時代後期、仏師定朝により確立され、広く隆盛した様式を踏まえた美作である。十二世紀前半頃の制作と見られる。
- 二、石見地方では同時期の作例として浜田市・安国寺の阿弥陀如来坐像が挙げられる。
- 三、実査 平成二十六年（二〇一四）十月九日

3. 阿弥陀如来立像

龍藏寺（大田市温泉津町井田イ二八の一）

概要

木造 彫眼 一軀 像高五三・四cm

形状

右手を胸前に挙げ、左手を下方にさげ、それぞれ第一・二指を捻じて立つ。螺髪は粒状に表す。髪際は摩耗して粒数確認不能。地髪部五段、肉髻部七段からなる。地髪は低く、肉髻を高く、面部を丸く造る。肉髻珠、白毫相、三道相を表す。耳垂部は環状で貫かない。鼻孔を浅く穿つ。衲衣は左肩を覆い、右脇下から前面を通って、再

び左肩から垂下する。覆肩衣は右肩に懸かつて右腹部で衲衣にたくし込まれ、右袖を造る。裙は脚部の中央で右前に合わされる。脚部の衣文は大腿部を避けて、股間にY字状に流れる。体軀の奥行きは薄く、衣文は浅く流麗に刻む。

法 量 (cm)

像 高 五三・四 (一尺七寸六分)

髮際高 四九・六 (一尺六寸四分)

頂ノ顎 一〇・四 面 長 五・二

面 幅 六・四 耳 張 八・一

面 奥 七・六 胸 奥 六・四

腹 奥 九・二 肘 張 一六・六

膝 厚 六・四 裳裾幅 一一・九

品質構造

一木造り。彫眼。

頭体幹部は一材から彫成される。後襟の線で背板状に別材をあて内割りを実施すか。打診では内割りは施していないように思われる。両肩から外側に各別材を矧ぐ。

伝 来

- 一、本像は龍蔵寺本尊として本堂須弥壇に安置されている。龍蔵寺は浄土真宗本願寺派に属し、山号は海東山。
- 二、寺伝では本像は毛利家臣大嶋和泉守吉種寄進と伝える。

三、『石見六郡社寺誌』によれば「もと真言宗の古刹であったが天正二十年六月、当地の地頭大嶋和泉守、阿弥陀如来の木像を寄進し、真宗に改宗することを命じた」とされる。

四、龍蔵寺に本像の寄進を伝えるものと見られる次の文書がある(島根県古代文化センター目次謙一氏の翻刻による)。差出人である大嶋和泉守吉種については詳細不明。

以上「異筆カ」

態申入候、仍我等 木佛様之儀、

御方御守へ喜進申候間、以来共ニ

御すへ候由、御しんかう尤候、前々

従 本願寺様御尋も候ハ、某より

可得御意候条、可口知候、為其

令申候、恐惶謹言、

大嶋和泉守

辰 三月十一日 吉種 (印・花押)

〔端書〕

大嶋和泉守

吉種

井田村

〔切封ウハ書〕

龍蔵寺慶徳坊

参人々御中

保存状態

肉髻珠・白毫（各水晶製嵌入）、両手首先、両足首先、表面仕上げ（肉身部漆箔、着衣部は彩色を施し金泥で文様を描く。頭部は彩色。眉・髭・瞳を墨描きする。）、以上後補。

光背、台座、以上後補。

備考

一、後補による表面仕上げによって本来の像容を正確に知ることは難しいが、平安時代後期、仏師定朝により確立され、広く隆盛した様式を踏まえている。十二世紀の制作と見られる。

二、実査 平成二十六年（二〇一四）十月九日

4. 観音菩薩立像

聖徳寺（浜田市周布町口十）

概要

木造 彫眼 一軀 像高一四七・二cm

形状

髻は七房に結う。天冠台は列弁帯と紐二条からなる。白毫相、三道相を表す。耳垂部は環状にしない。鼻孔は穿たない。天衣、条帛、裙、腰布を着ける。左手を胸前に掲げて蓮華を持ち、右手を垂下し掌を前に向ける。

法量 (cm)

像高 一四七・二（四尺八寸六分）

髪際高 一三一・八（四尺三寸五分）

頂ノ顎 二八・八 面長 一二・六

面幅 一三・三 耳張 一八・五

面奥 一八・二 胸奥 二〇・四

腹奥 二〇・八 肘張 四六・二

膝厚 一六・六（右） 裳先幅 三三・四

品質構造

一木造り。彫眼。

近年の修復による表面仕上げにより、表面観察からは用材の矧目を確認できないが、頭体幹部は一材で造り、背板風に一材矧ぐか。打診により内剝りを施していることが確認できる。両肩以下、両手首先、両足先、天衣遊離部を別材とする。

伝来

一、本像は聖徳寺本堂脇段に安置されている。
二、寺伝では聖徳寺近隣、浜田市吉地町にあった円通寺の旧仏といふ。明治期に廃寺となり当寺に移されたと伝える。

保存状態

宝冠（銅製鍍金）、白毫（水晶製嵌入）、両手先、両足先、天衣遊離部、表面仕上げ（肉身部に金泥、頭髮と着衣に黒色の塗料を施す。

眉と瞳を墨描きとし、目頭と目尻を群青で彩色を施す。)、以上後補。
両肩以下、後補か。

光背、台座、以上後補。

備考

一、近年の修理による表面仕上げによって本来の像容を正確に知ることは難しいが、平安時代後期、広く隆盛した典雅で平明な様式を踏まえている。十二世紀の制作と見られる。

二、実査 平成二十六年(二〇一四)十月十日

5. 阿弥陀如来坐像

福城寺(大田市川合町川合一五三五)

概要

銅造 鍍金 一軀 像高三二・六cm

形状

螺髪は浅い粒状。肉髻は低く造る。髮際線はややたわむ。肉髻珠・白毫相は表さない。三道相を表す。耳垂部環状。鼻孔を浅く穿つ。衲衣と裙を着す。衲衣は左足を半ば覆う。右膝に衲衣の衣端を示す。右手を胸前に構え、左手を膝上に置き、それぞれ第一・二指を捻じめる。左足を上に結跏趺坐する。

台座は上から蓮華(蓮弁十二方五段、魚鱗葺き)、反花(十二方、

間弁付き)、上框(円形)、下框(円形、隅足を四方にわずかに立ち上げ、それぞれ中央に切り込みを入れる)からなる。

法量(cm)

本体

像 高 三二・六(一尺八分)

髮際高 二八・九(九寸五分)

頂ノ顎 一一・一 面長 六・四

面幅 六・六 耳張 八・一

面奥 八・八 胸奥 一九・六(右)

腹奥 一〇・二 肘張 一九・六

膝張 二三・〇 膝奥 一五・三

膝高 四・二(左) 四・四(右)

裳先奥 一七・二

台座

全高 一四・三 全幅 二四・九

蓮華高 七・八 反花高 一・六

上框高 二・〇 下框高 二・九

蓮肉径 二五・四

品質構造

銅造。鍍金。

右肩以下と左手首先を別鑄とする他は一鑄で造る。銅厚は約3mm

で全体に均一。右肩は雇い柄にて取り付ける。左手首先は木製の柄により挿し込む。全身に鍍金を施す。背面に二か所、光背取り付けのための穿孔のある突起を造る（厚一〜二mm）。背面底部正中に小孔を穿ち、その左側に薄板状で穿孔のある銅製金具を鋏で取り付ける。台座に鋏留めするための小孔が二つ裳先左右にある。頭部の耳後を通る線で前後の合わせ型のずれによる不陸が見られる。合わせ目前側の螺旋一〜二列は、鋳バリの削平して形状がつぶれたところを鑿で円形に彫り直す。裳先に二つの小孔を穿つ。左袖下部に型持ち跡の小孔がある。裳先左に欠失あり。左腰地付部に湯まわり悪く欠失あり。頭頂内部に心棒を抜いた孔が確認できる。内面には広く灰白色の真土が薄く残る。右肩に鬆とひび割れがある。右肩以下には中型土が残る。

台座は二段框一鑄、反花一鑄、蓮弁は木胎を銅板で覆い、銅製鍍金の蓮弁を鋏で留める。

伝 来

- 一、本像は福城寺脇壇に安置されている。福城寺は浄土宗に属し、山号は大畠山。寺伝では元弘元年（一二三二）の創建とされる。それ以前は天台宗ともいう。
- 二、平成二十七年（二〇一五）十二月より島根県立古代出雲歴史博物館に寄託。

保存状態

左手先木製柄、後補。右下膊半ばより先、後補か。

光背（頭光、身光）からなる。頭光中央に八葉蓮華を表す。蓮弁には葉脈を表す。蓮肉は八方入隅で蓮実を表す。周縁部は宝相華唐草文を透かし彫りで表し、光脚部左右に三弁二段の蓮弁を表す。銅板を上下左右に四枚繋ぎ、金銅透かし彫りの周縁部、及び金銅製の蓮弁を鋏で留める。最大長四四・二cm、最大幅三〇・三cm、後補。

備 考

- 一、理知的で引き締まった面相、バランス良く的確に表された体軀の造形、自然に流れる衣文の表現等、鎌倉彫刻の特徴を備える。面貌の表現には東京藝術大学蔵銅造阿弥陀如来立像（建長五年（一二五三）等、十三世紀半ばの金銅仏に親近性がある。同様に十三世紀半ばの制作と見られる愛知瀧山寺・銅造薬師如来坐像との比較においては、左胸から腹部にかけて平面的に処理される衣文表現や、上半身に対してやや小さく弱々しい下半身の造形など共通性が高い。こうしたことから本像においても造立年代は鎌倉時代、十三世紀半ば頃と考えられる。

- 二、石見地方に伝わる中世の金銅仏としては、鎌倉末期から南北朝期頃の制作と考えられる浜田市宝福寺の薬師如来立像が知られるのみである。本像は鎌倉時代に遡る金銅仏の優作として、また一具と見られる台座を備えることにおいても貴重な作例といえる。
- 三、実査 平成二十六年（二〇一四）十月二十四日

6. 阿弥陀如来立像

浄慶寺（浜田市長浜町一五八七）

概要

木造 玉眼 一軀 像高七四・八cm

形状

螺髪は粒状に彫出する。髮際で三十八粒を数え、地髪部で七段、肉髻部で六段に造る。後頭部から襟足にかけて逆V字形に配される。肉髻珠・白毫相を表す。耳垂部環状。三道彫出。衲衣・覆肩衣・裙を着ける。衲衣は左肩から背面をまわって右脇下をとおり、再び左肩にかかって背部に垂れる。右肩を覆う覆肩衣は、右胸下で軽くたるんで衲衣にたくし込まれ、右腕にかかって右袖部を造る。右手は屈臂して掌を前に向けて立て、胸前に構えて第一・二指を捻じる。左手は肘を軽く曲げて垂下し、第一・二指を捻じる。頭体部は正面を向き、左足をわずかに踏み出して立つ。

法量 (cm)

像高 七四・八 (二尺四寸七分)

髮際高 七〇・二 (二尺三寸二分)

頂ノ顎 一四・二 面長 八・七

面幅 七・六 耳張 一一・二

面奥 一二・八 胸奥 一一・二

腹奥 一四・三 肘張 二二・八

袖張 二二・八 裾張 一七・七

品質構造

針葉樹材（檜か）。寄木造り。玉眼嵌入。

表面は後補の漆箔で厚く覆われ、底面は塞がれているため構造の詳細は不明。以下、表面からの観察による。頭体幹部は前後二材からなり内割りを施す。前部材は足柄までを同材で造る。螺髪彫出。右前膊別材。右袖部は外側前方に別材を矧ぐ。左袖部は内側前方に別材を矧ぐ。像底は最大二・七cm程度削り上げる。

伝来

一、現在は浄慶寺本堂の脇壇に安置されている。
二、もと順勝寺の本尊。順勝寺はかつて島根県大田市大森町に所在した真宗大谷派の寺院。平成十三年（二〇〇一）、順勝寺解散に伴い、浄慶寺に移された。順勝寺は『石見六郡社寺誌』に次のようであり、石見銀山最盛期の戦国末から桃山時代頃、当地にて天台宗から真宗に改宗し、本願寺顕如・教如と密接に関わったと見られる。当寺第八世とされる了明は下間頼龍（二五五二―一六〇九）。娘は初代銀山奉行・大久保長安正室である。

順勝寺（浄土真宗東派） 大森町字銀山

本尊 阿弥陀如来 本堂桁六間半 梁五間

境内百三十四坪 信徒七六人

沿革

往古は天台宗であつて南古庵と称したが、後順勝寺と改めた。本願寺第十一世顕如法主石山籠城の際に、当寺第八世了明これに従う。後天台宗を改めて真宗に歸した。本山第十二世教如、九州下向の時了明が願隨し法主歸路当国巡化のとき此寺に在ること三年であつた。その後兩度火災にかかる。

四、台座背面に次のとおり朱漆銘があり、寛政十年（二七九八）の補作と見られる。

【台座背面朱漆銘】

維時寛政九巳三月

晦日□□□寛政十年三月致上京再建立

當寺再□御□□願□処先例之通

御銀國公儀□御頼御書

□□□□附□□奉歡喜事現任権□□了照書之

保存状態

右手第三・四指先、左手第三指先、以上欠失。玉眼、白毫・肉髻珠（水晶製嵌入）、両耳垂部、両手首先、両足先、表面仕上げ（肉身部は漆下地に金泥塗り、着衣部漆箔、頭髪部彩色）、以上後補。裳裾まわり彫り直しか。

光背、台座（総高六七・六cm、最大幅四八・二cm、最大奥三五・八）、以上後補。

備考

一、鎌倉時代、仏師快慶の確立した安阿弥様と称される一群の阿弥陀如来像の特徴を明確に備えている。特に張りの強い面部の造形や、胸元の隆起した肉感的な表現は十三世紀前半の慶派仏師の制作を想定させる。快慶作阿弥陀如来像の着衣形式による編年に照らせば、法橋快慶銘の後半期から法眼位を得てのち建暦元年（一二一一）頃までのいわゆる第二形式に該当する。一方で快慶自身の作に比して形式的な造形性が看取されるところから、実際の制作は十三世紀半ば以降のものと考えられる。

二、実査 平成二十六年（二〇一四）十月七日

7. 阿弥陀如来立像

教西寺（益田市高津町一丁目四〇の一八）

概要

木造 一軀 像高九八・九cm

形状

螺髪は旋毛状（左旋）に彫出する。螺髪は髮際で二十九粒、地髪部五段、肉髻部八段からなる。地髪は髮際とともに大きくうねるようにつく。三道相を表す。耳垂部環状。鼻孔を深く穿つ。衲衣、覆肩衣、裙を着す。衲衣は左肩を覆って右肩に少し掛かり、右脇から腹前に廻して、左胸あたりで背部から紐で吊り、先端を再び左肩か

ら背面に垂らす。覆肩衣は背面から右肩を覆って、衲衣にたくし込
むことなく右腕に袖状に掛ける。右手を屈臂し、左手を垂下する。
両手とも掌を前に向けて第一・二指を捻じる。左脚をやや前に出し
て立つ。

法 量 (cm)

像 高 九八・九 (三尺二寸六分)

髮際高 九二・四 (三尺五分)

頂ノ顎 一八・二 面 長 一〇・五

面 幅 一〇・三 耳 張 一二・九

面 奥 一四・一 胸 奥 一五・六 (右)

腹 奥 一六・八 肘 張 二九・一

袖 張 二七・九 足先開 八・五

品質構造

針葉樹(檜か)。寄木造り。

頭体幹部は前後に三材を寄せ、内割りして割首する。頭部は正中
線で左右に割短ぐ。中・後部材は肉髻部で水平に切り離される。幹
部前面材は足柄まで通して造る。両肩先各別材。腰から裙裾まで右
側一材、左側は前後二材。右袖外側一材。左袖内側一材か。右前膊
一材。内割り部は漆塗り。

伝 来

一、現在は教西寺内の施設に安置されている。教西寺は浄土真宗本

願寺派に属する。

二、もと真福寺の本尊と伝える。真福寺はかつて教西寺近隣に所在
した柿本神社神宮寺である。本像は明治初年の神仏分離令に伴う
真福寺廃寺により教西寺に移されたという。

三、『高津町誌』(昭和十三年(一九三八)刊行)真福寺跡の項に次
の記事がある。

所在地 高津町大字高津字鴨山麓

史実の概要及び考証資料

元和元年松崎山麓より柿本神社と共に移転したる人丸寺は享保
八年柿本人麿朝臣一千年忌に当り真福寺と改称し勅願所たりし
が、明治の初年社寺分離により廃せられたり。而して当寺の本
尊たりし阿弥陀如来は当町教西寺に安置せらるゝこと、なり現
に之を保存す。木像高さ三尺九寸五分の立像(御身丈三尺三寸
五分御蓮座六寸)なり。

四、また同書の教西寺の項に次の記事がある。

阿弥陀如来の木像 高三尺九寸五分立像

此の仏像は元真福寺の本尊にして此外に脇立として観音、勢至、
菩薩の像ありしが、明治元年神仏判然令の布告に伴ひ、神道国教
廃仏、釈の思潮盛んなる頃柿本神社真福寺は完全に分離され真福
寺は廃寺となり、社僧即ち真福寺別当実応法印の時三体の仏像は
経巻や寺院の諸什器と共に通庵にて焼棄されんとしたものを教西

寺へ移したものである。時の教西寺住職は八代目義亮の代であった。

保存状態

白毫（水晶製嵌入）、両手首先、両足先、肉髻後部材、像底蓋板（主要部一材と補助材からなる）、表面仕上げ（白色下地、漆箔）、背面両肩下の光背受け、以上後補。玉眼、肉髻珠、右手第三・四・五指先、以上欠失。

光背、欠失。台座（総高一七・六cm、最大幅三一・二cm、最大奥三一・六cm、蓮肉幅二四・二cm、蓮肉奥二一・二cm）、後補。

備考

一、面相を理知的に表し、地髪部をたわませ、着衣や衣文は体軀の隆起に沿って自然に流れるなど、総じて鎌倉彫刻の様式を呈している。衣褶線の形や質などは京都・報土寺の阿弥陀如来立像（一二五八年）に近く、本像も十三世紀半ばから後半の造立と考えられる。

二、覆肩衣を右胸で衲衣にたくし込まない着衣形式は珍しく、これを共有する滋賀・延暦寺、兵庫・昌林寺、和歌山・清浄心院の阿弥陀如来立像（いずれも国指定重要文化財）は本像とともに着衣全体の形式や衣褶表現を含む、作風全般に親近性があり、仏師の系譜を想定できる可能性がある。

三、実査 平成二十六年（二〇一四）十月二十三日

8. 阿弥陀如来立像

善徳寺（浜田市三隅町芦谷一一四五）

概要

木造 玉眼 一軀 像高八六・二cm

形状

螺旋は粒状に彫出する。地髪部は低く造り、髪際とともにうねるように造る。肉髻珠、白毫相を表す。耳垂部環状。鼻孔を浅く穿つ。三道相彫出。衲衣、覆肩衣、內衣、裙を着ける。衲衣は左肩を覆い、右脇下から腹前に廻し、先端を再び左肩から背面に垂らす。覆肩衣は背面から右肩を覆って、右腕に袖状に掛け、右胸下で覆肩衣にたくし込む。內衣は左胸の襟際にわずかに折り返す。裙は正面で右前に打ち合わせる。右手を胸前に掲げ、左手は垂下して、両手とも掌を前に第一・二指を捻じる。左脚をやや前に出し、背筋を伸ばして立つ。

法量 (cm)

像高 八六・二（二尺八寸四分）

髮際高 八〇・四（二尺六寸五分）

頂上顎 一六・四 面長 一〇・八

面幅 九・四 耳張 一二・八

面奥 一一・九 胸奥 一二・四（左）

腹奥 一四・五 肘張 二七・九

袖張 二六・一 裾張 二〇・四

品質構造

針葉樹材（檜か）。寄木造り。玉眼。

頭部は主要部一材からなり、面部に一材を寄せて、内割りを施し、挿首とする。体幹部は前後三材からなり、内割りを施す。像底を割り上げて両足を彫出する。両肩以下に各別材を短く。右前膊に別材を挿込む。両袖の構造は短目が確認できず詳細不明。両袖内側各一材か。体側部は両腰以下、裾にかけて左右各別材を短く。

伝来

一、現在は善徳寺本尊として本堂に安置されている。善徳寺は山号は飛龍山、浄土真宗大谷派に属する。

二、昭和四十七年（一九七二）、善徳寺裏山崩落により本堂が壊滅。昭和四十九年、再建の際、本像を当院本尊として黒沢村の個人宅から迎えた。それまでの伝来は不明。

保存状態

玉眼、肉髻珠・白毫（水晶製嵌入）、左臉、両耳垂部、両手首先、両足先、両足柄、表面仕上げ（肉身部は錆漆下地に金泥塗り、着衣部は漆箔、頭部は群青彩色）、以上後補。

光背、台座（総高四五・四cm、最大幅五九・五cm、最大奥四六・五cm）、以上後補。

備考

一、全体に鎌倉彫刻の様式を示すものの、頭体の比例、地髪部のたわみ、丸味を帯びた面貌、正面に表れる衣褶線の表現など、全体に穏やかな印象をもつ造形性からは制作年代の下降を看取できる。鎌倉時代後期、十三世紀末から十四世紀初頭の制作とみておきたい。側面・背面の衣褶の彫りは深く立体的に表され、高い造形性を見せていることが特筆される。

二、実査 平成二十六年（二〇一四）十月二十一日

9. 大日如来坐像

永明寺（鹿足郡津和野町後田口一〇七）

概要

木造 玉眼 一軀 像高三八・四cm

形状

頭髪は高髻を結う。天冠台は列弁帯に紐一条で表す。地髪部の髪は天冠台より上は疎ら彫り。それより下は束ね目入り毛筋彫り。髻髪は耳を渡る。白毫相を表す。鼻孔を穿つ。耳垂部環状。三道相を表す。条帛を掛け、折り返し付きの裙と腰布を着ける。両手屈臂、胸前で智拳印を結ぶ。右足を外にして結跏趺坐する。

法量 (cm)

像高	三八・四 (一尺二寸七分)	實際高	二七・七 (九寸二分)
頂ノ顎	一六・六	面長	六・七
面幅	六・七	耳張	八・四
面奥	八・八	胸奥	七・七
腹奥	一〇・二	肘張	二〇・六
膝張	二七・八	膝奥	一七・八
膝高 (左)	五・五	膝高 (右)	五・二
裳先奥	二二・六		

品質構造

針葉樹材 (檜か)。寄木造り。金泥塗り・漆箔・切金。玉眼嵌入。
 頭体幹部は両耳後縁を通る線で前後に二材を寄せ (いづれの材も木芯は後方に外す。二材を合わせた形態は像底で見ると正面が広く後ろすぼまりの台形をなす)、内割りを施し、割首する。髻別材。両腕は各肩、肘、手首で短ぐ (両肩の短ぎ目は各三本の竹串で接合する)。両腰に各別材を短ぐ。幹部材の内割りが左方材にわずかに及ぶほかは両脇材には内割りを施さない。両脚部は裳先を含んで横一材、内割りを施す。幹部材、脚部材ともに内割り面は素地。丸鑿痕を残す。鑿幅は一・一 cm 程度。
 頭髮は彩色。他の表面は錆漆下地の上に施す。肉身部は白色下地、朱具下地、金泥塗り。口唇は朱塗り。額の毛、眉、髭は墨描き。着衣部は漆箔を施す。像底裳先部は布貼り漆塗り。

伝来

一、本像は永明寺宝物殿安置。永明寺は曹洞宗に属し、山号は覺皇山。寺伝では応永二十七年 (一四二〇) 三本松城主吉見頼弘が開創、開山は月因性初とされる。津和野藩主亀井家の菩提寺。
 二、像内に認められる左記の墨書により、元応二年 (一三二〇) に造像が始められたことが知られる。

(一) 頭部 (額の内側)

𑖀

(二) 体部正面

𑖀𑖀𑖀𑖀

𑖀𑖀𑖀

𑖀𑖀𑖀𑖀

𑖀𑖀𑖀

(三) 体部背面

𑖀𑖀𑖀𑖀

𑖀𑖀𑖀𑖀𑖀

𑖀𑖀𑖀𑖀

元応二年^{丙申}十月中始之

以上のうち、頭部の梵字^{𑖀𑖀} (ポローン) は一字金輪仏頂尊の種子である。体部正面の初行の梵字^𑖀 (ア・宝幢如来) ^𑖀 (アー・開敷華王如来) ^𑖀 (アン・無量寿如来) ^𑖀 (アク・天鼓雷音如来) ^𑖀 (アーク・大日如来) は胎藏界五仏の種子である。𑖀以下の三行、^𑖀 (アン・普賢菩薩) ^𑖀 (アー・開敷華王如来) ^𑖀 (ア・文殊菩

薩)、**𑖀**(ア・宝幢如来)、**𑖁**(アーンク・大日如来)、**𑖂**(アン・無量寿如来)、**𑖃**(ユ・弥勒菩薩)、**𑖄**(アク・天鼓雷音如来)、**𑖅**(ボ・観音菩薩)は胎藏界曼荼羅中台八葉院の諸尊の種子である。また体部背面の梵字三行は、初行の**𑖆**(ア)、**𑖇**(パン)、**𑖈**(ラン)、**𑖉**(カン)、**𑖊**(ケン)が大日法身真言、次行のうち**𑖋**(ア)、**𑖌**(ビ)、**𑖍**(ラ)、**𑖎**(ウン)、**𑖏**(ケン)が大日報身真言、三行目の**𑖐**(ア)、**𑖑**(ラ)、**𑖒**(ハ)、**𑖓**(シャ)、**𑖔**(ナウ)が大日心身真言である。末尾にある元応二年は歳次庚申。ここに丙申とあるのは誤記か。

三、寺伝によれば本像は隠岐で後醍醐天皇(一二八八-一三三九)に僧円心(赤松則村(一二二七-一三五〇))が献上し、後に天皇が大山寺へ奉納したものを、後世、津和野藩主亀井家の祖で因幡鹿野藩主・亀井茲矩(二五五七-一六一二)が下山神社再建の功績により大山寺から贈られたもので、茲矩の守本尊という。下山神社は、鳥取県大山町大字大山に鎮座する大神山神社の末社下山神社を指すものと考えられる。現在の下山神社本殿・弊殿・拝殿は大神山神社奥宮とともに国の重要文化財に指定されている。

保存状態

左手第二指欠失。玉眼、髻、白毫(水晶製嵌入)、宝冠・臂釧・腕釧(各銅製鍍金)、切金、以上後補。左鼻翼の一部を補修。光背・台座、以上後補。

備考

一、像内銘により元応二年(一二三〇)の制作と知られる。

二、智拳印を結ぶ金剛界大日如来像であるが、像内頭部に一字金輪種子ポロンを記しており、諸仏のうち最勝最尊である一字金輪としての大日如来を表したものである可能性がある。ただし一字金輪は『時処軌』に「形服如素月」と記すように肉身・着衣ともに白色であるのが本来である。

三、伝来第三項に記した赤松則村の後醍醐天皇への献上、天皇による大山寺への奉納、下山神社再建の功による津和野藩主の祖・亀井茲矩の大山寺からの受入を証する史料はない。しかしながら亀井家二代政矩が元和二年(一六一六)に、九代矩賢が文化二年(二八〇五)に、ともに大山・下山神社の再建を発願したことが棟札から知られ、また政矩が下山神社に奉納した短刀(国指定重要文化財)と太刀(鳥取県指定文化財)が現存しているなど、亀井家と大山寺とは深い結びつきをもっており慎重に検討すべき課題と考える。

四、実査 平成二十六年(二〇一四)十月二十二日

10・釈迦如来坐像

聖徳寺(浜田市周布町口十)

概要

木造 玉眼 一軀 像高一〇五・三 cm

形状

螺髪は旋毛状に彫出する。螺髪は髮際では下方を向く。髮際で二十三粒、地髪部五段、肉髻部八段を数える。肉髻珠、白毫相、三道相を表す。耳垂部を環状に造り、耳孔を穿つ。鼻孔を穿つ。衲衣、覆肩衣、裙を着ける。右手を胸前に構え、左手を膝上に置き、左右とも第一・三指を捻じる。右足を上に結跏趺坐する。

法量 (cm)

像高	一〇五・三 (三尺四寸八分)		
髮際高	八九・八 (二尺九寸六分)		
頂ノ顎	三六・一	面長	二一・五
面幅	一八・六	耳張	二四・六
面奥	二八・四	胸奥	二七・四 (左右とも)
腹奥	二八・四	肘張	六一・四
膝張	八四・六	膝高	一六・八 (左右とも)
膝奥	四七・六	裳先奥	五八・六

品質構造

針葉樹材 (檜か)。寄木造り。玉眼。

頭体幹部は前後二材を矧ぎ、内割りして割首する。背面材は地付まで達する。両脚部横一材。体側各別材でそれぞれ上下に二本の丸柄を造りだし、根幹材と結合する。左袖別材。以上の各材に内割りを施す。裳先別材。内割りには鑿跡を残す。鑿幅は一様でないが最大で5cm前後。前後材の緊結のため、地付から20cm程度上の位置

で前後に突起を造り棧とする。根幹材は前部材幅三五・二cm、奥一九・六cm、背面材幅三五・二cm、奥一七・四cm。肉髻珠を彫出する。

伝来

一、本像は聖徳寺本堂に本尊として安置されている。聖徳寺は曹洞宗に属し、山号は興国山。中世以来、当地を治めた周布氏の菩提寺として代々庇護を受けた。後背地にはその居城・鳶巢城 (周布城) のあった鳶巢山がある。

二、当寺に伝わる『当山世代記』(寛文十三年(二六七三)成立か)によれば推古天皇十六年(六〇八)、聖徳太子による創建という。また曹洞宗としての開山は洞雲湖泉(応永三十二年(二四二五)遷化)とするが創建年は不詳。一方で開基については周布氏四代の兼信(元亨四年(一一三二四)没)と記し、開山の寂年から一世紀ほど遡ることは検討の余地がある。

三、本像は寺伝では釈迦如来とするものの、印相は左右とも第一・三指を捻じる阿弥陀如来の中品下生の来迎印を結び、混乱がある。

保存状態

玉眼、白毫(水晶製嵌入)、両手首先、両脚部材の右足の裏あたりに補修による別材、左肩補修材、表面仕上げ(肉身に金泥、頭髪と着衣に黒色の塗料を施す。眉・髭を墨描する。)、以上後補。光背、台座、以上後補。

備考

一、作風は全体に大ぶりで、やや煩瑣に傾く衣文の表現から南北朝から室町時代初期の十四世紀後半の造立と見られる。
二、実査 平成二十六年（二〇一四）十月九日

11・菩薩坐像

本願寺（出雲市多伎町口田儀八七四の一）

概要

銅造 一軀 像高六七・七cm

形状

五房を束ねて髻を高く結び、元結いは捻り紐状。髻髪一条が下がり、耳にかかる手前で二条に分かれ、耳を渡る。垂髪は後頭部左右から各一条下がり、肩で三輪に結って五条に分かれて波状に垂下する。髪筋を刻む。面部には丸くふくらみがあり、両眼は高い位置に左右離れて細く切れ長に刻む。鼻翼には丸味があり鼻孔を穿つ。口唇は口元を少し上げ、中央上下に括りを入れる。白毫相、三道相を表す。耳垂部には大きな耳璫を着ける。胸飾及び腕釧を着ける。胸飾は中央に六花弁の花文を配し、垂飾三条が下がる。腕釧は紐一条、連珠、紐一条からなる。また両膝にも瓔珞（花文、菱文、連珠からなる）が沿う。衲衣、覆肩衣、僧祇支を着け、裙をまとう。僧祇支は腹部中央で紐により結ぶ。左胸に沿って僧祇支の留め具が覗く。

右手を胸前に構え掌を前に向け、左手は左膝上方にて掌を上差し出し、第一・三指を捻じる。右足を上に結跏趺坐する。

法量 (cm)

像高 六七・七（二尺二寸三分）

髮際高 五六・二（一尺八寸五分）

頂上顎 二五・四 面長 一三・三

面幅 一〇・七 耳張 一六・四

面奥 一五・四 胸奥 一四・九

腹奥 一七・二 肘張 二九・四

膝張 四五・一 膝高 八・七（左）

膝奥 三六・一 裳先奥 三九・一

品質構造

すべてを総型による一鑄にて造立する。現状では鍍金の跡は確認できない。銅厚は六〜十二mm程度。中型土は概ねきれいに抜かれているが、頭部、両肩、右胸、右腕に薄く残る。火中により右膝から腰廻りにかけて大きく欠落するなど損傷が著しい。

伝来

一、本像は本願寺脇壇に安置されている。本願寺は曹洞宗に属し、山号は巖青山。寺伝では応永元年（一三九四）の創建で開山は秀閑和尚、当初は臨濟宗建仁寺派という。

二、河上昌敏『訂正増補田儀村沿革史』（一九一五年、島根県立図

書館蔵)に次のとおり沿革が示される。

本願寺創建

明徳五年此の年改元あり応永元年となる。秀閑和尚中郷房床の地に巖青山本願寺を創建し、十二房を建立す。臨済宗賢仁寺派なり。後三世住職の時、曹洞宗に改め十楽寺末となる。

- 初め秀閑和尚朝鮮国高麗に至り梵鐘鐃鉢並に聖観世音菩薩の像一体及自分の像一体を造り百済船に乗せて帰る。船安濃郡の海岸に着く。後世百済船の着きし所をクダラと称せり。是石州安濃郡久手浦の西方なり。依て観音の像は子院慈眼寺に奉安す。
- 三、昭和三十八年(一九六三)七月二日、島根県指定有形文化財。

保存状態

右手指先第一〜三指、左手指先第二・四・五指、右腰部、以上欠失。右手指先第四・五指、右膝部、以上欠落(現存)。白毫(水晶製嵌入)、宝冠・胸飾(各銅製鍍金)、以上後補。

光背、台座、以上後補。

備考

- 一、装飾品や垂髪などの造形に手の込んだ巧妙な表現が見られ、また面部や胸部などの肉付きは大らかに自然に表されている。また背筋の伸びた姿態の造形など全般に高麗時代後期、十四世紀前半の作風を備えている。
- 二、寺伝によって知られる本像伝来の事情は、像の制作年代とも整合し一定の信頼をおいてよい。日本に伝来する高麗仏の多くが、

その請来の事情や時期を明確にし得ないなか、本像請来の事情が他作例の場合においても一般論として参考になるう。

- 三、実査 平成二十六年(二〇一四)十一月十一日

12・釈迦如来坐像

本願寺(出雲市多伎町口田儀八七四の一)

概要

木造 玉眼 一軀 像高五五・二cm

形状

螺髪は旋毛状に彫出する。螺髪は髮際で二十四粒、地髪部四段、肉髻部六段からなる。髮際はうねるように造形する。肉髻珠、白毫相を表す。三道相を彫出する。耳垂部環状。鼻孔を穿つ。衲衣、覆肩衣、內衣、裙を着す。衲衣は左肩から背面を覆って右肩に少し掛かり、右脇下から腹前に回して先端を再び左肩から背面に垂下する。覆肩衣は右脇腹で衲衣にわずかにたくし込む。両手を仰向けて腹前で重ねて結跏趺坐する。

法量 (cm)

像高 五五・二(一尺八寸二分)

髮際高 四八・二(一尺五寸九分)

頂一顎 一八・四 面長 一一・七

面幅	一一・八	耳張	一四・七
面奥	一五・八	胸奥	一七・七(右)
腹奥	一九・二	肘張	三七・七
膝張	四五・二	膝高	九・八(左右とも)
膝奥	三二・七	裳先奥	四〇・三

品質構造

針葉樹材(檜か)。寄木造り。玉眼。

頭体幹部は耳の後を通る線で前後に寄せ、前側一材、後側左右二材からなる。前後材の間に板状の薄い一材を挟む。内削りを施し、割首をする。像心束(長五・五cm)を彫り残す。前後材の結着のため、前後から棧を彫り残す。両脚部は横一材。裳先別材。体側各別材。両袖口部各別材。両体側と両脚部の間にそれぞれ襠材を挟む。内削りの鑿幅は約七mm。肉髻珠は彫出する。内削り部は漆で仕上げる。

伝来

- 一、本像は本願寺脇壇に安置されている。本願寺は曹洞宗に属し、山号は巖青山。寺伝では応永元年(一三九四)の創建で開山は秀関和尚、当初は臨濟宗建仁寺派という。
- 二、本像はもと桂林庵伝来と寺伝にいう。桂林庵は十二坊あったという本願寺の子院の一つで、移転して本願寺釈迦堂となったとされる。その後、釈迦堂も廃され現在に至る。

保存状態

玉眼(瞳は墨で描き、周囲を朱で括る。目頭・目尻に群青を入れる)、白毫(水晶製嵌入)、体幹部前後材に挟む板状の材、両手首先、鏝、表面仕上げ(肉身部は黒色を呈す。着衣はやや赤みを帯びた暗褐色(ベンガラか)で彩色する。頭髪は緑青彩。口唇朱彩。肉髻珠朱彩)、以上後補。

備考

- 一、筐体を積み上げたような体軀の造形、太く立ち上がってうねる装飾的な衣文の表現など、南北朝時代、足利將軍家に重用された仏師院吉・院広が大成し、以後この派に広く通用した様式を備えている。また造像の技法においても、体幹材前部に像心束を彫出し、幹部前後材の結着に左右二本の棧を用いる院派特有のものを踏襲している。本像においては、引き締まった面貌表現や、生き生きとした衣文の表現は南北朝時代の造形を思わせるものの、奥行き深く上体がやや詰まった体軀のバランスや、大ぶりの螺髪造形などから、やや遅れて室町時代初期、十五世紀初頭頃の造立と考えられる。類例としては京都・大徳寺の釈迦如来坐像(一四〇四年、院慶作)が挙げられる。

- 二、実査 平成二十六年(二〇一四)十一月十一日

13・地蔵菩薩坐像

金剛院（大田市温泉津町イ七五八）

概要

木造 彫眼 一軀 像高一〇・一cm

形状

頭部は剃髪に表す。頭光を負い、法衣を着し、両手を袖のうちで胸前に合わせて蓮台上に坐す。頭光は素文。

法量 (cm)

総高 一八・二(六寸)(残存)

像高 一〇・一(三寸三分)

最大厚 三・三 頭光径 九・二

台座高 五・一(残存) 蓮華座高 三・七

蓮華座幅 九・一

品質構造

広葉樹。一木造り。彫眼。

頭光と台座を含めて像全体を一材から半肉で彫出する。背面は浅く鑿跡を残しつつ概ね平滑に仕上げる。表面は薫染により暗褐色を呈す。

伝来

一、本像は金剛院本堂に安置されている。金剛院は真言宗に属する。

二、背面に次のとおり墨書銘があり、木喰により寛政十年（一七九八）四月二十八日に制作されたことが知られる。

【頭光背面墨書銘】

日本千タイ

之内なり

〔注〕

1  (カ) は地蔵菩薩種子。

2 周囲に地蔵菩薩真言を記すか。

【背面墨書銘】

寛政十年四月廿八日成就

国王國中

地蔵大菩薩

父母安樂

木食五行菩薩八十一才(花押)

天一自在法門

三、平成二十七年（二〇一五）十二月より島根県立古代出雲歴史博物館に寄託。

保存状態

蓮華座を残して台座下半部を虫損により欠失する。

(当館学芸課長)

備考

一、本作は背面に記された墨書銘から、寛政十年（二七九八）、江戸時代の遊行僧・木喰明満（一七一八―一八一〇）による作例と確かめられる。一連の木喰仏に比してみれば珍しい小品ではあるが、その特有の造形的特色を十全に備えており、木喰その人の作とみることに疑念はない。

二、木喰の石見巡錫については木喰本人による記録『御屋と帳』により、寛政十年（二七九八）三月十五日から五月七日にかけて五十二日間の滞在と知られる。しかしながらその足跡の詳細については不明な点が多い。石見地域に伝来する木喰の作例は、四月九日から十四日にかけて滞在した浜田市三隅町・正法寺の未完成作《女神立像》と四月二十日から五月一日にかけて滞在した大田市温泉津町・龍澤寺の《釈迦如来坐像》が知られるのみであった。本作はこれに加えられる希少な作例であり、またその墨書銘によって制作年月日が明らかかな点でも重要である。さらにその制作日が『御屋と帳』により知られる温泉津町・龍澤寺における逗留期間に合致し、かつ本作現蔵の金剛院が近隣に位置していることは、本作の伝来の正しさを保証している。全国に七百以上とされる木喰仏は一定程度すでにその所在が明らかにされているなかで、ここに新たな作例が加わることは貴重である。

三、実査 平成二十六年（二〇一四）十一月十二日



1. 観音菩薩立像 圓福寺 (大田市)



1. 観音菩薩立像 圓福寺 (大田市)



2. 阿弥陀如来坐像 龍蔵寺 (大田市)



2. 阿弥陀如来坐像 龍蔵寺 (大田市)



3. 阿弥陀如来立像 龍蔵寺 (大田市)



3. 阿弥陀如来立像 龍蔵寺 (大田市)



4. 観音菩薩立像 聖徳寺 (浜田市)



4. 観音菩薩立像 聖徳寺 (浜田市)



5. 阿弥陀如来坐像 福城寺 (大田市)



5. 阿弥陀如来坐像 福城寺 (大田市)



6. 阿弥陀如来立像 浄慶寺（浜田市）



6. 阿弥陀如来立像 浄慶寺（浜田市）



7. 阿弥陀如来立像 教西寺（益田市）



7. 阿弥陀如来立像 教西寺 (益田市)



8. 阿弥陀如来立像 善徳寺（浜田市）



8. 阿弥陀如来立像 善徳寺（浜田市）



9. 大日如来坐像 永明寺 (津和野町)



9. 大日如来坐像 永明寺 (津和野町)



9. 大日如来坐像 永明寺 (津和野町)



10. 釈迦如来坐像 聖徳寺 (浜田市)



10. 釈迦如来坐像 聖徳寺 (浜田市)



11. 菩薩坐像 本願寺 (出雲市)



11. 菩薩坐像 本願寺 (出雲市)



12. 釈迦如来坐像 本願寺（出雲市）



12. 釈迦如来坐像 本願寺（出雲市）



13. 地藏菩薩坐像 金剛院 (大田市)



赤外線写真



13. 地藏菩薩坐像 金剛院 (大田市)

島根県立石見美術館
研究紀要 第10号

発行日ー平成28年3月31日

編集発行ー島根県立石見美術館

〒698-0022 益田市有明町5-15

TEL 0856-23-2050 FAX 0856-31-1878

印刷ー株式会社タイピック